

よく笑ふ人と云へどもよく泣く人多くの人は我を知らなく  
 我が歌をあざけりきかぬ友が顔何の友かと思ひても見つ  
 いたつきは起らずやなご北國に雪とたゝかふ友が上思ふ  
 銀杏返しなでまはしては娘といふやさしき氣にもなりてみしかな

熊祭りを見て

河崎なつ

のどやかにかなしき歌をうたひつゝ亡びゆくかな女夫のアイヌ等

病みて臥して

文科四年 樫部鳥羽子

死のかげの我れにも添へる心地して心細さのせ  
 まり來るよひ  
 いつまでかかゝる心に世にいきんひそかに思ふ  
 我が生のはて  
 起きてより床に入るまで何事かなしつゝ暮す日  
 をあやしみぬ  
 よわきもの人なりけりないさゝかの病をえても  
 かなしかりけり

秋の日よめる

いと細き虫の音きゝてつくづくとおもへば父も  
 なき身なりけり  
 はらからの行末思ひ小さき胸いたむる背を虫な  
 さしかな  
 いつしかに草子にあきて花瓶の菊の一花ふとむ  
 しりけり  
 文机に匂ふ白菊手折りつゝ友にしたしむ歌おも  
 ひしぬ  
 あかつきの空にのこれる月見つゝ箒もつ手に木  
 の葉ちるなり  
 朝まだき清めし庭にはらゝと散りしく木々の  
 梢淋しも  
 時雨降りしづけき秋の夕暮に手ずさむ琴の音し  
 かなしも  
 月冴えて虫の音しげき此の夜頃奈良の都は淋し  
 かるらむ  
 住みなれし奈良の小鹿は今宵こそ春日の森にな  
 きあかすらむ

強きものわれなりけりと思へども思ふあとより  
寂しさのわく  
此の一夜いかに降るらん雪の朝井の端にたつ母  
君をおもふ  
かすかなるひびきのこしてとぎれたる受話器を  
持ちてひとりなきしか  
あかゝとともる電氣もうらがなし小さき部屋  
に病みて臥せれば

大竹千葉子

たゝひとり文よむ夜半にゆくりなく友の玉章え  
たる嬉しさ  
たえだえの罪をもせめねもおもに文よせたま  
ふ友のみなさけ  
ひたすらに文よむ夜半の一時をゆめみて過ぶす  
われのおろかさ  
文机に結びし夢のあと消えて思へばかなし父上  
のかげ  
父まさば内外の事に心をばいたむる事はなき身  
ならまし



學び舎の月の桂を手折りてもたれにさゝげて我  
は祝はん

山下 さい

雨にぬれし硝子のまごにうつりたる夕の山をみ  
るもかなしな

春秋にことなる石にあらねども時雨ぬらせば泣  
くとしおもほゆ

ふきたゆむ風のくるひにふねの帆のよこしわな  
ごの見ゆるさびしさ

はふり落ちしなみだそのまゝかたまるるを見るが  
かなしき昨夜の蠟燭。

こみごりのゆづり葉さへもあさましく霜にしほ  
みてたてる我には

雪しろき富士が投げたる紫の影の國なる甲斐に  
すむてふ

美しくならべる書の金文字を春の光のすべるめ  
でたさ

四年みぬ故郷の春にあふことの近しと思ひ遠し  
とまごふ

初鹿野とみ

何となく泣きても見たき心地して秋くれかたの  
空を仰ぎぬ

熱高き友にのぞまれ暗の夜を外に出てとりぬ松  
の上のゆき

本田よしゑ

珍らしく木枯ふかぬ冬の宵われにはすこし物た  
らぬかな

うら庭の残れる雪に枯れし木のうつる夜ばかり  
淋しきはなし

よろしきは硝子戸越の春の日を脊にあびつつも  
のを縫ふとき

潮の香と初秋の日と肌にしむあしたの濱をひと  
りあゆめば

土肥長 恵

すむ月に残れる雪の青白く光るを見ればかなし  
かりけり

岡田 いし

いく千とせ遂に開かぬ扉へとかなしき道をゆく  
か人の子

野も山もうすがすみして影あはき硝子戸こしに  
ほのかなる月

佐保姫のけはひのひまをまちわびて紅さして來  
し白木蓮花

清水の檜皮の屋根にやはらかく小雨のそゞく春  
のたそがれ

ちら／＼と白魚のむれののぼりゆきてきよらに  
水は春となりぬる

文科三年 稻垣のぶ

初秋は灯のもとに文よみて水の音など聞かばよ  
ろしき

はたはたと時をおきてはあふる戸の響ふけては  
しげき冬の夜

薬の香つとはなをつく病院の冷たき扉ひらきて  
入れば

むら消の雪をふみつつ畑の道朝とく行くがつら  
かりしかな

池邊よしゑ

子なくして老ゆる女の俤に似たるかあはれ物か  
けの雪

霜白う山茶花ひとり匂ふ朝をくる戸の音のさえ  
さえしきよ

たへかねて戸をあけてみぬ聲ひきて小犬ひたな  
く木からの宵

秋はゆく紫の衣妹にと母にいはいはれしあぢきなさ  
かな

小谷 信子

鉢植の梅の根もとに残る雪凍れるままに年立ち  
にけり

むら消の雪を戴く高山のあなたに心はする夕よ  
何事も後れたる身のねきことは智恵の扉の開か  
れむこと

岡本 節

騒がしき子等外に出でて木枯のやみける如くく  
つろげる母

梢より雨とこぼれて一むらの竹にすこしく残る  
白雪

田邊 馨

あるが上に積もりし雪はとく消えて古きがなほ  
ものこるわびしさ



朝な朝な我手ならしし雨戸をば母やくるらむ霜  
しろきあさ

星一つ空に光りて湖のしじまを渡る夕ぐれの鐘

田中やす

玻璃の戸は嬉しはつかし夜な夜なを枕にさへも  
月のごひ来て

しめしめとしぐるる中にくれてゆく灯ともし頃  
の街のかなしさ

木枯の店の大戸はおろされて場末の町の宵のさ  
びしさ

中原伊久野

ひらひらと山茶花ちりぬ消え残る雪ひとむらの  
白きが上に

木枯は何にたはるるからからと梧桐の實を鈴と  
ならして

内田ゆき

思ふまま泣きてつかれし我心をの如晴れし冬の  
空かな

電燈の光あかるき夜の街を眩しげにゆく旅人の  
ひれ

なきたきは遙けき道を辿りきてとちし扉のまへ  
に立つ時

山内きい

木枯のなかに光りて穂すすきの葉のすれあへる  
音の悲しさ

木枯の肌にさむき夕まぐれ母が手織の衣ときき  
けり

凧の吹きまく中に立てれどもひとり静けき我心  
かな

北國は淋しかりけりうす雪のほかに光るきささ  
らぎの宵

大澤きみよ

楡の葉か時雨か何か窓をうつ秋くれかたの宵の  
かなしさ

悲しさのやらむ方なき夕ぐれは涙してきく木枯  
のこる

紫の衣妹の晴衣にと母はぬふらむ木からしの夜  
を

雪白う残れる庭にいとあはき月かげのさす夕た  
のしも

今日もまたあはき疲れの腫をあげてなつかしみ  
見る落日のいろ

草蔭のはだらの雪のすすらんの花のやうなる薄  
月夜かな

吹きあれし木枯おちて遠方にわらうつ音の牙え  
さえしさよ

柳下三巳

うつし世は木枯寒し然はあれど春の日はさせ君  
かゆくみち

木枯のすすぶまにまに枯すすき主なき庵の板戸  
なづらむ

山野すみれ

木枯は又我庭に葉をまきぬ小鳥の歩む音ひびく  
ほど

宵やみに林も里もつつまれぬところまだらに雪  
あかりして

母こふる涙の顔のうつる夜はわか硝子戸もはつ  
かしかかな

いさかひて出てゆきし人をなつかしみ涙してみ  
るさされにし戸を

枯木立ちす月さして暮にけり残る雪のみ白う光  
りて

霜柱くづるる音の寒けさにおもひおこしぬ旅に  
ある身と

前島美子

手を面を赤くなしつゝ凧あぐる子らに賑はふ木  
枯の野邊

くまくまに雪はのこりて庭の土の色黒くろと見  
ゆる今日かな

江藤馨

かくてまたわびしう暮れぬささ竹のいさゝかの  
雪けふも消えず

まつはれるわが悲しみに似たるかな消ええで草  
にのこるあはゆき

めぐりある人皆われに冷たかりわれと我身にあ  
ぢきなき夜は

遂にわれ人にまじらふ性ならずかく思ひつゝ涙  
ながしぬ

時にわれ淋しうなりて涙するこのくせ故にまた  
なみだする



なやましき頭おさへてうつふせばまふたに残る  
灯のかげのうき  
かりそめのいたはりに居てうちふせば敷布の白  
の色もかなしき

鹽川 くに

青白き月のうつせる我かげと共にぞ走る木がら  
しの夜を  
蝸牛這ひたるあとの一筋のしろ光れる古き寺  
の戸

師岡 文代

紺青のそらに連なる雪の山白うのこりて冬の日  
落ちぬ

日の光土の色さへ春めきぬ家かげに雪は白うの  
これど  
木枯の風ふきはてし一時の其しづけさよ其さび  
しさよ

齋藤 またを

た、一つ入江にとまる芦舟のともしはあかし芦  
の花散る  
ほのほのとあけゆく空に富士のねは雲の戸あけ  
て笑みて立たせり

雪よけのこもの形のをかしくも五つ六つある叔  
母君の家

雪に暮るゝこの天地の静やかき物のけはひもお  
ちつきて見ゆ

やはらかく南天の葉に積りたるたそがれ時の雪  
の色かな

つらきこと心に秘めてすごさんとよと思ひたる  
雪の夕暮

大西 しづ

むれてゆく鳥のゆくへのをちかたの山静やかに  
夕かすみする

うつくしき島の少女の黒髪のスふ日静けきはは  
島の朝

紫のうしほにうかぶ島かげに白帆となりてしは  
しいねまし

青白く月さす海を思ふかなたそがれ時の雪の山  
里

あき日させはうまし少女の白き頬にうす紅さす  
と雪のはなやく

枝ながら庭の木の葉を吹きつけて土に聲ある木  
がらしの風  
さらさらと清水ながるる岩かげにかじかなくな  
り夕ぐれにして  
手向けむと手折る椿の花の上に露の外なる露を  
こぼるる

古賀 まつよ

大方のよとたちし如戸を開ちてひとりししまに  
居るか嬉しも

もののかげくろく亂れて霜白き月夜木枯吹きや  
まぬかな

陽の影とみ空の青に春はきぬ土にいささか雪は  
のこりて

夢のおと淡き雪見ゆ灰色の雨の中なるささらき  
の午後

文科一部二年 富澤 美穂

あやまちて机の上にこぼしたるすこしの水の寒  
き夜半かな

四季咲きの紅きつばみのほのかにも雪間に見ゆ  
る君の庭かな

齋藤 かつ

夜の汽車の窓のがらすにふどうつる我か顔を見  
る時の寂しさ

小さき日のかの窓戀し花束をあたへんとして丈  
足らざりき

雪の夜を父母とねて天地にほりするものもなか  
りき我は

山田 嘉都恵

樂しみのひとつとなりぬ夕暮の窓によりゐて物  
思ふこと

祖母君の娘盛りの物語よるの炬燵にきくなれし  
かな

大吹雪波と狂へる天地にかよわき我のあるがさ  
ひしや

ふれふれと雪をよろこぶいとけなき心のわれに  
あるがかなしき

美しくつもれるまゝの雪の上にとそ足あとをつ  
けてみるかな



我泣けばかげにほゝるむかの人によらじと思ひ  
またよりしかな

にぎやかにうかるゝ我に寂しさをこのむ心のま  
た多くあり

我に背をむけて走りし友なれど泣けるときけば  
我もかなしき

關 みさを

安けき死を思はずひたぶるに生きむ生きむとあ  
せる悲しさ

ものいはで臉どちて死に入りし人の様にも安ら  
かにあり

父母は我安けしと思はして今日もなごみて過し  
ますらむ

かゝる夜に母のいまさはなご思ひうとうとこま  
た幻に入る

安 永みち

明日をまつことより外に何もなく夜のすとうふ  
を獨守れる



偶

感

◎自己に對する解決

文科三年生 江藤 馨

紛糾した周囲の事情に、餘りにも自己を没溺  
し去つてかへりみなかつた往日を追想して、自  
己の存在の果して那邊にあつたかを疑ひ、自己  
なるものゝ根底の不確實を悟つて、口惜しさに  
煩悶した事もある。熱し易い自分の性情は、或  
る機會に觸れ時としては極端な感情の激動を來  
して、其の結果精神上に一大打撃を受け、否受  
けたと自ら感じて、自己の猶少からず動搖しつ  
ゝあるのを悟り切なる後悔の念に打たれた事も  
ある。自己の餘りに小に、餘りにつまらなく、  
餘りに愚かである事に悶えた事も幾度であらう  
「眞の人になり度い」と切に希つた結果は、或る

安らけく息あるものの眠るときひそかに雪のふ  
りいでにけり  
雪の夜に生れし故か死ぬ日にも雪の降れなご思  
はるゝかな

紫の靄たちこむる夜の町にちらちら雪のふりい  
でしかな

いつなりけむ雪のふき入る停車場にまよなかに  
來る人を待ちしは

箱庭の谷にのこれるいささかの雪を喜びよる雀  
かな

扉 扉 寂しき人が來て叩く扉よ永久にそのま  
ゝにあれ

いつよりかあかぬ扉の前に來て立つといふ癖え  
し心かな

灯して母と娘がすみなれぬ家の戸さしをするも  
さびしき  
我が家に開かれずして傳はれる戸あり我等の母  
の母より

時は、この様に動搖して居る且弱い自分は、何  
か偉大なる力に頼つてそれに導かれるのでなけ  
れば到底正しい道を踏み眞の人となる事が出來  
ないであらうと、頻りに自己の不安内心の空虚  
からあるものを要求した。ある時は又、人生  
のスタートは人格である、健全な人格さへあつ  
たならば人世に何の恐る可き事があらう、何の  
難い事があらうと叫んで、自分は以後一切冗口  
をきくまい怒らず怨まず總ての感情殊には悪感  
情を抑へて、平靜にかつ圓滿に人格の修養を務  
めなければならぬと決心した。其の結果は、自  
分の心の一隅にふと邪念の片影が映る事があつ  
ても、最早それが直ちに自分に何等かの悪影響  
を齎すかの様に非常に厭はしく恐ろしく思はれ  
た。此の考は殆ど病的に一舉一動につきまどつ